

現 地 通 信

研究対象としてのインドネシア

—— インドネシア予備調査報告 ——

本 岡 武

I 予備調査の目的と旅行経過

京都大学東南アジア研究センターは1968年4月から第2期計画に入り、重点的に調査研究の対象国として、従来のタイとマレーシアのほかに、インドネシアをとりあげることになった。

タイ・マレーシアについては、東南アジア研究センターの関係者が調査研究に必要な知識をもち、また両国の関係機関とはかなり密接に連絡をたもっている。しかし、インドネシアについては、われわれのもっている情報が十分でなく、また関係機関との連絡もきわめて限られている。しかも、1965年9月30日事件いらいスカルノ体制は崩壊し、1966年3月11日のスハルト体制発足いらい、インドネシアの政治的姿勢は急激に転換し、きわめて流動的である。経済情勢もスカルノ政権末期の破局的段階からようやく立ちなおろうとしているが、いまだ安定的段階に到達していない。それだけに、政治的経済的に比較的安定しているとみてよいタイ・マレーシアにくら

べて、インドネシアにおいてのわれわれの調査研究は多くのむずかしい条件をもっていると考えられた。

東南アジア研究センターとしては、私がバンコク滞在中の1964年3月、また同じく石井米雄教授がバンコク滞在中の1967年3月に1週間ばかりジャカルタを訪ねたほか、下記の関係者が調査研究に従事しただけである。

吉井 良三（教養部教授）

今立源太良（東京医科歯科大学助教授）

酒井 敏明（東海大学講師）

1965年7月～9月 予備調査をかねてジャワ島の森林生物相の調査

山口 真一（防災研究所教授）

1965年7月 火山性地すべりの調査

野口 英雄（大学院工学研究科学生）

1967年1月～1968年1月 バンドン工科大学留学、インドネシアにおける建築

そこで、私がインドネシアにおける調査研究をいかにセンターとして進めるべきかという課題のもとに、1968年3月31日から7月10日までインドネシアに派遣されたわけである。私としては、このセンターのインドネシア研究計画をいかに進めるべきかという問題のほか、私自身の研究課題であるインドネシア農業開発をいかに研究すべきかということもまた、この予備調査の目的とした。

年度末の3月31日に京都を出発、マニラによってアジア開発銀行および国際稲作研究所をたずね、シンガポールを経由、4月5日ジャカルタ空港に到着した。約2週間ジャカルタに滞在、インドネシア政府諸機関、大学および国連諸機関を訪問した。なおこの間、ボゴールへゆき中央農業試験場や生物研究所も見学。またジャカルタでセンター派遣の留学生である山田勇・土屋健治両君のビザの国内

申請をプッシュするよう努力した。

4月17日にジャカルタからジョグジャカルタへ飛んだ。ここでは主としてガジャマダ大学の世話になり、問題地域である中部ジャバの農村を調査、あわせてボロブドゥール、プラバナンの両遺跡を見学した。ここに1週間あまり滞在して、中部ジャバの問題点をつかみ得たと思う。

4月24日にスラバヤへ汽車でゆき、26日スラバヤからバリ島のデンパサールへ飛ぶ。デンパサールを中心にバリ島南部の農村を訪ね、とくに水利組織に興味をひかれる。今春京大農学部で修士をとって帰国したニョマン君の案内で、かれの郷里であるシンガラジャへ山越えをする。島の南北の経済的・文化的な相違はおもしろかった。

5月4日、デンパサールからシンガポールへ飛ぶ。今年に入って就航したタイ・インターナショナルでシンガポールへ。ここで飛行機をのりかえ、5日にクアラルンプールに着く。ここで、マレーシア計画の交渉のため来訪中の川口桂三郎教授・口羽益生助教授・坪内良博助手や、マラヤ大学への訪問講師栗本一男・前田成文両氏に会い、一行の交渉や見学に参加する。

5月10日クアラルンプールをたちペナンを経由、11日に北スマトラのメダンに入る。ここを基地として、北スマトラのプランテーション農業を見学、またパラカンブランダンの北スマトラ石油開発協力会社の現場を訪問。メダンからパレンバンへ飛ぶ。スマトラ南部の低湿地開発状況を見て、25日にジャカルタにもどる。

ジャカルタでは5月27日より6月1日までインドネシア国家研究会議(LIPI)とアメリカの学術研究会議(National Science Academy)共催のインドネシア食糧会議(Workshop on Food in Indonesia)に出席。この会議にはアメリカから約30人の専門家、イ

ンドネシアからは約100人の食糧関係の学者と官吏が参加し、ひじょうによく準備されたものであった。この結果は、この10月に報告書が刊行される。そして、この報告書はさしあたってインドネシア食糧問題の最もすぐれた文献になろう。私はこの会議で多くの知見を得たが、とくに多くの関係者と知りあいになれたことを幸せに思う。

会議終了のあと、西イリアン入国の許可を求めるのに大いに努力した。しかし、とうとう許可は得られなかった。またこの間も、京大東南アジア研究センターからインドネシアへ留学する土屋健治・山田勇両君の入国許可を求めるため関係機関を回った。こうした政府機関との折衝をとおして、いろいろと教えられところが多かった。西イリアンをあきらめて、6月12日、ジャカルタからバンジュールマシンに飛ぶ。ここでは、バリト一河下流部低湿地干拓を見る。これは潮汐干満利用干拓であって、外領開拓のひとつのケース・スタディとして興味深い。さらにリアム・カナンのわが国賠償によるダム工事現場に宿泊する。このカリマンタンでは森林伐採の現場をみたかったが、これはとうとう実現できなかった。

18日にバンジュールマシンから、スラバヤにもどる。ここでは、わが国の技術協力としての東部ジャバのトゥモロコシ増産計画を見る。

21日にスラバヤからスラベシのマカッサルへ飛ぶ。マカッサルでは、このスラベシの農業開発の現況を教えてもらうとともに、ジープで島の南部を一巡する。軍のCivic Missionと称する開拓現場も見学。

28日にマカッサルから一気にジャカルタに帰る。ジャカルタでは資料収集と関係者訪問のため1週間を忙しくすごす。しかし、インドネシアのなかでの首都と地方との差異をきびしく感じさせられる。

7月7日、ジャカルタからバンコクへ。
バンコクではタイ農業開発の資料をあつめ、
そのあと香港経由、7月10日予定どおり帰国。

II インドネシア調査研究の重要性

インドネシア研究調査は、いろいろな意味
において、きわめて重要だと思われる。

第1は東南アジアにおけるインドネシアの
重要性である。数字でいうと、東南アジアの
陸地面積 450万 km² のうちインドネシアは
190万 km² を占め、また1964年推定人口 2 億
4700万のうち 1 億300万を占める。面積・人口
ともに、4割前後に達している。その占める
地政治学的地位が重要であるばかりでなく、
その停滞的経済状態や流動的政治情勢は、イ
ンドネシアをして、たんに東南アジアだけで
なく、広く国際政治のひとつの焦点たらしめ
ている。とくに日本の東南アジア政策のなか
で、インドネシアの占める重要性はきわめて
大きい。たとえば、1968年度のインドネシア
援助は 1 億 1 千万ドルにのぼる。これだけの
贈与と借款を日本から受けている国はインド
ネシアしかないのである。

第2。しかもインドネシアは自然科学、社
会科学のいずれの見地からみても、きわめて
多くの興味ある研究問題をもっている。たと
えば、その自然的基礎は熱帯降雨林気候と火
山性地形とのために、東南アジア大陸部とは
著しく異なり、歴史・宗教・文化についても
特殊な条件をもつ。政治情勢はいまなおきわ
めて流動的であり、経済状態は東南アジア
のなかではビルマとならんで最も低い水準に
ある。そのうえ、インドネシアは unity and
diversity を特質としているように、インド
ネシア内部における地域的分化現象があらゆ
る面について見られる。そのほとんどの研究
対象が未開拓であるといい得よう。

第3。もちろんオランダ時代、インドネシ
アについての自然科学・社会科学両分野にお

ける研究は、いちじるしく高い水準であった。
しかし、オランダ人がこれらの業績を本国に
持ち帰ってしまった。戦後はオランダ人はも
とより外国人の研究は、研究条件の困難さの
ために、ほとんど停止状態にある。戦後の外
国人研究者によるインドネシア研究の状況は、
それぞれの専門家のひとつの研究対象にさえ
なり得よう。しかし、この国の広大さ、また
そのもっている問題の多様さから見ると、イ
ンドネシアについての外国人研究者の研究は、
きわめて微々たるものといえよう。さらに、
インドネシア人研究者による研究も、独立後
約20年の今日まで、ほとんど進められていな
いといってよい。もちろん、かれらの業績は
限られているものの、決して無視すべきでな
い。ただ、ここではっきりいえることは、戦
後のインドネシア研究は、その問題の大きさ
や多様性にくらべ、ほとんど進められていな
いという事実である。

それだけに、インドネシアの研究は、今日
きわめて重要な課題となる。この点について
は、とくに詳しく論ずる必要はなからう。

III インドネシア現地研究調査を 進めるにさいしての諸問題

私のこのたびの予備調査にさいして最も注
意を払ったのは、インドネシアで現地研究調
査を進めるにさいしての問題点の所在と、そ
の克服対策であった。もちろん、その問題点
は研究対象、現地調査方法などの研究者側
のもつ条件によって異なる。したがって、具
体的には個々のプロジェクトごとに、その問
題が確かめられなければならないであろう。
ここでは現地研究調査の全体に共通する問題
をとりあげたいと思う。

1. 調査許可の問題

タイにおける外国人の調査研究は国家研
究会議 (National Research Council) の許可を
必要とする。そのかわり、その許可さえあれ

ば、入国査証を得ることについては、ほとんど障害がない。ところが、もしタイの条件がインドネシアにあてはまるものとして、研究計画をたてると、とんでもないことになる。というのは、インドネシアにおいては、外国人研究者の研究調査にかんし、なんらの規定もない。というのは、インドネシアにはタイの国家研究会議に相当する LIPI といわれる「インドネシア学術研究所」*がある。これは大統領直轄機関であり、タイの国家研究会議が総理府に直属するのとはよく似ている。しかし、LIPI はいずれは外国人研究者をコントロールするための法規をもつであろうといわれているが、現在までのところ、それに該当する法規は公布されていない。

そこで現在のところ実行の可能な方法は、

* インドネシア政府における学術研究の担当機関は、インドネシア学術研究所 (Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia, 英訳 Indonesian Institute of Sciences) であって、Djl. Tjik Ditiro 2/3, Djakarta に所在する。Prof. Sarwono Prawiroharoto が Chairman である。この LIPI は、1967年10月、MIPI (Madjelis Ilmu Pengetahuan Indonesia, 英訳 Indonesian Council on Science) と Lembaga National Research (これはかつての高等研究所) とが合併してできたものである。LIPI は大統領に直属する。LIPI には、つぎの9国立研究所と1文書資料館とが含まれる。

- 1) Lembaga Biologi Nasional (生物研究所) ボゴール
- 2) Lembaga Ekonomi dan Kemasjarakatan Nasional (経済・社会研究所) ジャカルタ
- 3) Lembaga Geology dan Pertambangan Nasional (地質鉱物研究所) バンドン
- 4) Pusa Research Nasional (中央研究所) バンドン
 - a. Lembaga Elektroteknika Nasional (電気工学研究所)
 - b. Lembaga Instrumentasi Nasional (機械工学研究所)
 - c. Lembaga Metalurgi Nasional (金属研究所)
 - d. Lembaga Kimia Nasional (化学研究所)
 - e. Lembaga Fisika Nasional (物理研究所)
- 5) Pusat Dokumentasi Ilmiah Nasional (科学文献センター) ジャカルタ

(1) 研究計画に関係のあるインドネシアの大学あるいは研究機関から招請状 (invitation letter) を得る。これは、在インドネシア機関から直接に受けるか、在東京インドネシア大使館をとおして間接に受けるか、ふたつの方法がある。もし在インドネシア機関と外国人研究者とがかなり密接な関係をもっている場合には、招請状を直接に受けとる方法のほうが時間の節約になろう。

(2) 招請状を受けとってから、在東京インドネシア大使館あるいは在神戸インドネシア領事館にビザを申請することとなる。この場合一般旅券はもちろん、ある期間以上の公用旅券携行者については、本国照会となる。本国照会には相当に時間がかかるものと思わなければならない。

調査許可というより入国許可がさしあたっての問題となり、それには相当の日数がかかるから、研究計画をたてるにさいしては、これに必要な日数を十分に見込まなければならない。

入国後、調査許可が必要かどうかは、明確な法規のない以上、残念ながら、ここではなんともいうことができない。入国滞在許可がそのまま調査許可になるかどうかはわからない。おそらく、研究地域、研究対象、研究者数などによって異なるであろう。とくに外領で数人からなるパーティが長時日でかけるときには、とうぜん関係官庁からの調査許可が必要とされると考えるべきである。いずれにせよ、調査許可の問題は case by case で処理されるであろう。

単独研究ではなくパーティとして現地調査を進める場合は、できるならば関係官庁のなんらかの許可書なり証明書のあることが望ましい。そのほうが、それらを持たないときより、あらゆる意味で、はるかに安全である。また、パーティとして調査する場合、調査許可の問題だけからいっても、関係機関からイ

インドネシア側のカウンタパートを得、共同研究の形態で研究を進めるほうが望ましいのではないかと思われる。(原則的にいって、インドネシアの現地調査にさいし、インドネシア側との円滑な共同研究を進めるのが、あらゆる意味からいって理想である。もちろん、それを実現するにはいろいろむずかしいことのあるのも当然であろうが。)

単独で村落定着調査を行なう場合、調査許可が絶対的に必要である。この調査許可はジャカルタの中央政府機関からだけでなく、省・県などの地方行政機関からも受けなければならない。村落定着調査にさいしては、あらゆる関係機関から少なくとも了解だけでも得ることが必要である。

調査許可の問題もまた case by case で処理されなければならない。同時に、インドネシアに到着後、調査許可を得るために、かなりの日時を必要とする場合も考えておくべきである。私の経験からいっても、西イリアンへの入国は、今のところでは不可能に近いことも付記しておきたい。

2. 交通状況

インドネシアの調査研究を進めるためには、自動車が必要である。もっとも、単独で長期間1カ所に滞在する場合には、オートバイなりスクーターでもさしつかえない。

自動車を入手できるか否かが、調査の成否を左右すると考えられる。インドネシア側と共同研究を行なう場合も、相手側から自動車の提供を受けることはむずかしい。唯一の自動車入手可能な方法は、ジャカルタその他主要都市で自動車をチャーターすることである。1日の走行キロ数にもよるが、1日約20ドルで借り入れることが可能である。ただチャーターの世話をしてくれるものに予め連絡をつけておけば、それだけ時間がセーブされよう。

ただしスマトラのメダンをのぞくと、外領

では自動車をチャーターすることさえ、きわめてむずかしい。コネクトをいかにつけて自動車を確保するかが、調査許可入手についてむずかしい問題と思われる。

ジャバ島内は自動車さえあれば自由に動ける。主要道路の状態もそう悪くはない。しかし外領を訪れるとなると、ガルダ国内航空線がなかなか厄介なことになる。現在スケジュールどおり運行しているとはいえないし、時によっては座席の確保が容易ならぬことがある。この対策は、「決していそいではならない」の一語につきる。というのは、待てば必ず飛行機は飛ぶし、また座席はとれるのだから。そこで日本で予定をきめて、その予定どおり飛行機で旅行しようとするれば、どうしてもうまくゆかなくなるから、旅行日数に十分な余裕をみておくことが大切である。こうした計画さえたてれば、ガルダによる国内航空便はそれほど苦にならなくなる。

3. 宿泊施設・食事・保健衛生

私はインドネシアの宿泊施設・食事・保健衛生などがタイにくらべて、ひどく劣るとは思わなかった。宿泊施設として、いちばん厄介なのはジャカルタである。ことに外国人はホテル・インドネシアを利用するが、このところ満員のことが多く、容易に部屋がとれない。とれても1泊部屋代だけで16ドルをこえる。経費からいってもたまったものでない。経費の点でホテル・インドネシアにつぐのは、ホテル・インドネシアの北側にあるビスマ・ワルタ(Press Club)であり、ここは3食つき12ドル見当である。日本人旅行者は予め頼んでおいて日本の会社のメス(共同宿舎)に泊まるものもある。しかし、これはその会社の事業と関係のないものとしては利用しがたいであろう。このようにジャカルタの宿泊事情はバンコクとは全然異なる。

ジャカルタ以外の都市では、宿泊施設としてのホテルに困ることはない。また、ホテル

のない田舎にはパッサールミングーと称する政府官吏のためのゲストハウスがある。だからタイの地方都市のホテルほど立派ではないが、経費もわずかで済むので、まず問題がないとみてよい。

食事はどこでも簡単にとれるインドネシア料理店がある。また都市にはかならず中国料理店を見つけだすことができる。だから、食糧を携行して旅行しなければならないということはない。この点、タイとあまり違わないとみてよい。

保健衛生についても、タイほどよくはないが、しかし特に大きな障害をなすとは考えられなかった。ただし医療施設や医療品入手はタイにくらべ劣るから、それだけに、日常の自分の保健衛生について、タイにおいて以上に注意を払うことはいうまでもなからう。

宿泊施設・食事・保健衛生の項目のなかで、特に厄介なのは、くりかえしいうように、ジャカルタでの宿泊である。

4. 言 語

インドネシア語をマスターすることが調査研究上必要なことはいうまでもない。この場合、インドネシア語がタイ語にくらべて比較的容易だということは、インドネシア研究者にとって大きな助けになる。もちろん本格的にインドネシア語をマスターすることは、なみたいていではないらしいが。

インドネシアの指導者階層は外国語とくに英語なりオランダ語なりにきわめて優れている。これはインドネシア語のできないものにとっては、ひじょうに助けになる。もちろん研究題目によって異なるが、英語だけではたいていの場合、深くつっこんだ研究は行ないがたいであろう。

5. 図書・資料・地図など

研究を進めるにさいして、図書・資料・地図が当然必要になるが、インドネシアではこ

れら印刷物が限られている。官庁や試験研究機関の調査研究は、タイプされただけで印刷に付せられていないものが多い。それだけにゼロックスの利用が必要であるが、これはジャカルタに1カ所しかない。またゼロックスをとるのに1週間かかる。だから簡単に資料類が入手できると考えてはならない。とにかく、そのためにも時間がかかることを覚悟しなければならない。なお、図書・資料・地図などが案外わが国で入手できることが多い。

6. 経 費

インドネシアにおいての調査研究上の経費をタイにおけるそれにくらべると、結論としては大差がないといえよう。

よく「インドネシアの旅行は高くつく」という声を聞くが、これはジャカルタの経験にもとづくことが多い。ジャカルタはインドネシアで例外的であるからであり、とくにホテル・インドネシアがそのまた例外をなすからである。一步ジャカルタを出ると、ホテルの宿泊費、食費あるいはバス・鉄道運賃などは、タイにくらべると、少なくとも2～3割は低廉だと考えてよい。

インドネシアの調査経費について、つねに問題となるのは、インフレーションにともなうドルとルピアとの交換率である。幸い現在は自由交換制度が実施され、ジャカルタで政府公認両替店に行きさえすれば、自由に、かつその日の相場ドルをルピアに交換することができる。私の経験だけでいうと、本年4月はじめ1ドルを290ルピアで交換し、6月終わりには、1ドルを360ルピアで交換した。約3カ月間に、ルピアの価値は約17%下落したわけである。だから、つねに必要な金額だけルピアに交換してゆけばよい。だから、この点は全然困ることはない状態になっている。

経費として注意すべきは、交通機関がさきに述べたような事情にあるから、計画にゆとりをもたねばならないこと。それとともに重

要なのは、政府機関から許可をとることはもちろん資料を入手するために、さらに関係者にアポイントメントをとるためにも、予想外の時間がかかり、それだけに滞在日数が延びざるを得ないことである。これは1日あたりの経費の問題ではなくて、調査所要日数の問題になろう。つまり、総経費の問題となる。この点こそ、調査研究を予期どおり遂行するためには最も注意すべきだと、私には強く感じられた。

7. インドネシア人の behavior について

最後に、しかし調査研究上きわめて重要な問題であるインドネシア人の behavior について、私の感想を記しておかねばならない。これはインドネシア研究のひとつの結論とも考えられ、したがってわずか100日あまりの予備調査の経験では、なんともいいがたい。

まったく印象だけをいうと、私はインドネシア人をたいそう好ましく感じた。その多くが陽気で、人なつこく、心温かい人々であった。ただ今日のきびしい経済条件が、かれらの生活をひじょうに困難にさせている。このことをわれわれとしては十分に理解しなければならぬ。また官庁の非能率のために、い

ろいろと手数がかかるが、これまた現在のインドネシアの行政機構や行政能率を了解する必要がある。同じことはインドネシアの強烈な民族主義についていえよう。民族主義にプラスの面もあれば、マイナスの面もある。いたずらにマイナスの面だけを批難することは、厳に慎まなければならない。私は「郷に入れば郷に従え」と主張するのではない。「郷に入れば郷を理解せよ」というプリンシプルがなにより重要だと思う。

むすびとして、インドネシア研究調査計画にさいし、特に重要だと考えられるつぎの3点を提案したい。

第1は、以上述べたところから明らかなように、具体的な調査研究計画は case by case で進められようが、計画をたてるにあたって、相当な時間的余裕をもって、関係機関とコンタクトをとりつけることが必要である。

第2は、タイ・マレーシアとくらべて、インドネシアの調査研究にはその2倍の時間がかかるものとして計画すべきである。

第3は、同じくタイ・マレーシアにくらべて研究調査条件が困難であるだけに、なるべく現地調査の既経験者が現地に送られることが望ましい。(1968年9月29日記)